

LGBTのこと、性のことを話しやすくするために

LGBTとは、Lesbian（レズビアン：女性同性愛者）、Gay（ゲイ：男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル：両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー：出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きたいと思っている、また生きている人）の頭文字をつなげた、いわゆる性的マイノリティを示す言葉です。LGBは「好きになる相手の性別が異性だけとは限らない」という性的指向(Sexual Orientation)の面でのマイノリティ。トランスジェンダーは「身体の性別にそって指定された社会上の性別と、自認する性別・生きようとしている性別が一致しない」という性自認(Gender Identity)の面でのマイノリティです。国際連合などでは近年、性的指向と性自認の頭文字からなる「SOGI」という言葉で性の多様性を表現しています。国内外の様々な調査から、LGBTは全人口の3~10%と言われています。5%とすると、20人にひとり。例えば多摩市内の公立校では、ひとクラスにひとり以上はLGBTである生徒がいる、と考えても差し支えありません。LGBTは当たり前にも多摩市内でも生活しているのです。

しかし、学校や職場でLGBTであることをカミングアウトできる人は、まだ多くはありません。この記事をお読みのLGBT当事者の方のなかにも、「自分以外の当事者に会ったことがない」「本当は会ったことがあるのかも知れないが、誰も言ってくれないから分からない」という方も、少なくないと思います。また、家族や友人にLGBT当事者がいる方も、「自分の子ども以外のLGBT当事者を知らない」「友人として助けたいけれど、当事者でない自分になにができるのか分からない」といった方も、おられることでしょう。筆者自身もゲイですが、大学3年次まで「同じ学校の同級生にもLGBT当事者がいる」ということを身をもって体験できませんでした。

LGBT当事者の人が、LGBTのことを話せない・話づらい理由には、大まかに考えてみるだけでも、様々な理由が存在します。

- ・孤立：自分以外の当事者に会ったことがなく不安
- ・性の話であること：恥ずかしい、自分の身体のことを詳しく話したくない、学校や職場で話していいのかわからない、など
- ・差別・偏見・無理解が存在していること：いじめの不安、「気のせい」「一時的な迷い」などと否定されたくない、

地元は保守的で難しい、当事者自身であってもLGBTについてよく知らないのでも話せない、など

- ・アウティング（望まない相手に、勝手にSOGIのことをばらされること）：家族、友人、先生、ゼミ生、部活仲間、同僚、上司など、誰になら知られてもいいかどうかは、人によっても、時と場合によっても異なる

話せない理由はひとつだけ、ということはありません、いくつも重なります。話したい気持ちよりも、話せない理由の方が強くなりがちです。また、LGBT当事者ではない人も、「自分には受け入れ難い性の話だったらどうしよう?」「『LGBTとかよく分からない』とか言ったら、怒られないかな?」「『他の人には知られたくないから、絶対に秘密にしてね』と言われても、約束を守りきれぬ?」など、性にまつわる話を聞くことに慣れていない不安は、大きくなりがちです。LGBT当事者も、非当事者も、お互いに性のこと、SOGIに関する話を話づらいし、聞きづらい。そうした現状が、5%はいるはずのLGBTが、日常的になかなか見えない環境を作っているのではないのでしょうか。

日常的に話しやすい環境を整えることは、なかなか簡単なことではありません。まずはイベント形式で、性についておしゃべりする場所を作ってはどうでしょうか。例えば国際基督教大学ジェンダー研究センターは、「ふわカフェ」と題した、自分の性のことをふわっとしゃべれるカフェタイムを設けています。「今日のお話は、ここだけのお話。今日のメンバーは、ここだけのメンバー」「ここにはさまざまな人がいることを忘れず、否定をしない」「話したくないことは話さなくてOK」「一度に話すのはひとりだけ」など、自分の話したことが誰かに否定されることなく、安心して話せるためのルールを設定しています。いじめやアウティングの不安を軽減させる工夫です。

イベントの実施や参加が難しいときは、本を読むのもオススメです。色々な当事者の声を聞くことを通じて、自身の言葉を見つけていって欲しいと思っています。

執筆：加藤悠二（かとうゆうじ） 特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ東京スタッフ。1983年東京都生まれ。国際基督教大学大学院卒。修士（行政学）。一般企業就労を経て、国際基督教大学ジェンダー研究センターに7年間勤務。2017年度より現職。